×　　×

しかし、一九六〇年代にはいって、バルト神学の問題点が新しく問いなおされてきているようである。それは、彼が提示した聖書的、且つパウロ的な事柄についての、学的根拠を問うことに於いて始まったと言えよう。

×　　×

わたしの信仰を語るときカール・バルトの福音理解を抜きにしては語ることは出来ない。それは先にも述べたとおり、わたしがキリスト教に最初に接した時、日本の教会の聖書理解、福音理解は多少の違いはあってもバルト神学に影響されていたからである。その意味で、わたしの信仰も、所謂バルトの息がかかったものであった。

×　　×

バルト神学は何故、世界的規模でキリスト教会に受け入れられたのかということについては、先に少し述べたが、それは、ただの理屈のこととして観念的に受容されたのではない。彼の場合もそうであるが、一人の信仰人として、且つ聖書を現代に語る一人として、聖書の何を、どのように語ればよいのか、という信仰的苦悩から生じたものなのである。その意味では、「聖書をそのままに語ればよいのだ」という聖書信仰を主張する人達が、単純に言ってのけるような時点の問題ではない。むしろ、聖書をそのままに語るそこに起こってくる問題を、現代という時代状況、

又はそれぞれが置かれた文化状況との関わりでの苦悩なのである。先に述べたブルトマンの「非神話化」ということも、そのような苦悩から生じて来た問題であった。

×　　×

時代の如何に関わらず、またその置かれた場の文化的、自然的な風土に一切関係無く、真理性は永遠に変わらない普遍的なものである、という立場は、かつてはマルクス主義とキリスト教の立場であった。この信念を掲げて世界に挑んだそれらの結果が、いかに教条的、且つ独善的なものであったかということは、広く私たちの知るところである。「我が立場は普遍的な真理である」と言う、そこには、苦悩がなく、その人達にとって、誤謬は常にそれを受け入れようとしない者の側にあるのだ、という問題意識しかないように思う。そのような人達に決定的に欠けていることは、厳密な自己否定がないということである。つまり、「疑う」ことは「悪」であり、「問う」ことは「信」に反することだとされる。そして、ただひたすら「知」を犠牲にして「信ずる」こと、その教えに妄従妄信することにすべての関心が注がれる。つまり一つの主義や主張、教義に統一化され、「信念信仰」に陥り、全く誰も手がつけられない熱狂的独善的教条主義者、原理主義者、となってしまう。このような人や集団を、宗教や政治、その他世間のどこに於いても見ることが出来る。このような有り様を、わたしはかつて「宗教化現象」とよんでいたのだが、今では「統一化現象」と言っている。その後、身近に生じてきた様々な「破壊的カルト集団」の

問題、つまり人格の統合性を切り崩され、自己決定能力を破壊され、行動や感情、情報をコントロールされてしまう現象、即ち「マインド・コントロール」されてしまう出来事が、「宗教カルト」「政治カルト」はいうにおよばず、自己開発セミナーと称する「教育カルト」、さらに、ネズミ講式の販売組織である「商業カルト」等が世間のどこにでも見られ、善良であり、且つ教養があると思われる人達が、所謂「ひっかかって」いる姿を多く見かける。これらの現象を総称して「宗教化現象」または「統一化現象」とわたしは言ってきた。

勿論、「我が立場は普遍的な真理である」と言う人達と所謂「破壊的カルト」の人達とを軽々に同一化することは出来ないことは、十分に承知している。が、そこには何時も「破壊的カルト」に陥る危険、即ち熱狂的独善的排他性が潜んでいる事は確かなのである。その危険性から救い出し、本来的な働きを生み出していくためには、それ自身の内に厳密な自己否定、一般的な言葉で言えば、鋭い自己批判の精神が常に働いていなければならないと思う。その精神の働きこそ、先に少し述べた「疑」であり「問」ということなのである。つまり、対象と自己とを含めたそれに「疑問を持つこと」は即とち対象と自己自身とを「問うということ」であり、それがほかならぬ「求道するということ」なのである。その在り方こかくそ「自己否定」ということであり、そこにおいてこそ「覚」即ち、自己の在るべき出発点に「目覚める」ことが出来るのである。その意味で、疑と問とをそれ自身に持っていない、つまり、自己否定をそれ自身に秘めていないどの

ような主義も主張も教義も論理も、私は決して信じないし、受け入れようとは思わない。

×　　×

しかし、「自己否定」というとき、問題は、どこからの自己否定なのか、ということである。また、それ自身が秘めている自己否定というときの、「それ自体」とは何であり、また、その根拠は何なのかということ、これこそが、「わたしの問い続けて来た」最終的な一点なのである。そして、結論を先に言えば、イエスが提示し、パウロがキリストにおいて見出した事がそれであり、イエスはそれを「神の支配」と言い、使徒パウロはそれを「復活のキリスト」と言った。わたしはイエス又はパウロが提示したそれを、わたしの霊的体験を経ての直観的表現でもって言いなおすなら「命のたぎり」その事であり、それをロゴス化して表現するなら「神の創造における自然」その事、ということになる。

×　　×

さて、先にバルト神学が持つ歴史的な意義について、それは啓蒙主義思想の影響によって生じて来た聖書理解、つまり自由主義神学と教会の在り方を誤りとし、「聖書が証しするキリストが神の啓示である」という立場に立ち、教会はその一点に立ち帰るべきことを示すことによって、教会とその信仰の在り方を本来の姿に導いたことにあると言った。それは、他でもなく、神学が人間学に成り下がろうとする危機から、真に神学することの何であるかを示したと同時に、「神

をなおざりにした理想主義の哲学と自由主義神学が、悪の力の前に脆くも崩壊するという事実、そしてわれわれが現在、直面している問題は、神の恵みなしでも生きて行けると思いあがった現代人も、家庭崩壊や核軍備という問題その他を抱えて、さら自己崩壊の危機に曝されているという事実、これらすべての事柄を解決する道はキリストの福音の中に示されていることを彼は提示した。バルトの神学は型式原理においても、実質原理においても、徹底して神の言葉、即ち「聖書が証しするキリストの啓示」に求め、一切の人間の努力の無効を主張する。そして、神と人間との断絶を回復せしめる働きは、只三位一体（父と子〔イエス・キリスト〕と聖霊の働き）の中に展開される歴史（神の予定と和解の出来事）による神の呼びかけにおいて生起してくる人の信仰による応答によってのみだとする。このようにバルトによれば、「聖書の中から神が呼びかけてくること」「神が現れて来ること」と、それに対して「人の信仰による応答」の統合は、ただ神の一方的な啓示の出来事、キリストの出来事が生起することによって初めて可能になるというのである。これは神認識にかかわることである。

×　　×

このような、神認識についてのバルトの主張は徹底している。その一つの表れを先に少し述べたブルンナーとの論争に見ることが出来るが、それを語る前に、バルトの「信仰の類比」と、それに対する「存在の類比」に関して、厳密さを欠くが、一応語っておきたいと思う。

「存在の類比」とは、神と自然（人間を含めた）との間には存在的な区別と同時に類比とがあるということである。これを認識論的に言えば、自然の存在を通して存在としての人間は神を認識出来るという立場のことである。それに対して「信仰の類比」とは、神の啓示に接するときのみ神の人格に人の人格が類比となるからであって、絶対にそれは、神と人間との「存在の類比」によるのではないということである。ここのところは、バルト神学の核心であり、それは聖書が語る信仰の基本であり、その意味で、この一点について明確に理解しておくことは、人間があらゆる分野――勿論宗教も含めて――での営みを健全に為し遂げて行くために、つまり「魔」に陥らないために最も大切な一点であると言える。

しかし、それだからこそ、バルト神学の問題もここに潜んでいるのである。「わたしの問い続けてきたこと」の大切な一つもここにある。

×　　×

一九三四年に起こったバルトとブルンナーの論争の概要を、わたしが伝え聞いたのは一九五三年頃、一九歳頃であったが、その厳密な論争の内容を論じるだけの能力は、今もって私にはない。しかし、そこで提示された事柄は信仰人として生きる私自身にとって、のっぴきならぬ問題を含んでいた。

×　　×

何度も記したとおり、バルトの基本的な立場は「聖書が証しするキリストだけが啓示だ」ということである。この立場は人間の宗教的な感情や経験等に基づいてキリスト教を見ないということである。また倫理という観点からもイエスを見ないという立場でもある。この立場の徹底は人間の理性による神認識の完全否定であり、人間に於ける神的な内在性の極端な否定でもあった。その意味では、宗教改革に始まる福音主義的（聖書原理に基づいた）信仰、即ちプロテスタントの信仰を完結させたのだと言える。それは、先に記した「存在論的類比」というカトリック的な神認識の否定であり、人間に先立つ神の一方的な働きかけにしたがい、神の真理のふところに包まれて始めて神を認識出来るという「信仰の類比」によるという立場であった。このような神認識について、その詳しい内容を十分に理解出来ないままで、バルトの信仰理解は私を圧倒した。と同時に、そのバルトの立場に対立する主張をしたように伝え聞いたブルンナーに対して、当時は馴染めなかった。しかし、彼の著書の多くが日本語に翻訳されたり、来日したりするにおよび、彼が投げかけ、問うている事柄が少しは理解出来るようになり、自分自身の信仰理解にとって一つの問いとなっていったのである。先に彼のマルクシズム批判に共感したことを少し述べたが、それは彼の「正義」や「人間性の限界」等の著書によるものであった。

×　　×

ブルンナーが投げかけた問題は、神の啓示と人間性との結合点についてのことである。バルト

の立場は、人間の側からの神との結合点は無いと言う。しかし、ブルンナーはバルトの立場を基本的には認めながら、尚、人間の側には神に対する応答責任の能力は残っているのではないか、とバルトに問いかけたのである。

このような論議は、当然の事として聖書にその論拠を問うことになる。これについて使徒パウロは次のように語る。

不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知る事ができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。

―ローマの使徒への手紙一章十八節～二十節―

このパウロの言葉をブルンナーは、神を知らない異邦人といえども、天地万物を通して神について何らかの認識をもつことができ、またもっているにもかかわらず、神を神として認めようとしないのは、いかなる弁解の余地はない、と解釈する。それに対して、バルトの解釈は、このパウロの言葉は、ローマ人への手紙全体の思想、つまり人間の罪とイエス・キリストによる人間の

救いを語る関連に於いて、人間全てが罪の下にある、ということを中心に語っている言葉なのであって、人間が神を認識出来るか否かという、人間の神認識についての一般論として、パウロは語っているのではない、と解釈する。

ここでよく注意しておきたいことは、問題は「解釈」ということである。さらに、次の聖書の語句についても論議がなされる。それは旧約聖書創世記にある人間創造について記されてある語句に関してである。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神はご自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

—創世記一章二十六節以下—

これはアダムの系図の書である。

神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造された。

—創世記五章一節以下—

神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。

「人の血を流す物は、人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ。」

—創世記九章一節以下—

以上の語句で解釈について論議の対象になったのは「かたどり」と「似せて」ということである。

×　　×

神が「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と言われた創世記の語句は、聖書の人間観の根本にある思想である。従ってキリスト教に於いては、この「かたどり」と「似せて」という語句を、どのように理解し解釈すべきかということで古来様々な論議がなされてきた。そして伝統的な解釈は「かたどり」を「理性」の意と解し、それは人間が神の前から堕罪（神を忘れて自我に生きる人間の不完全性）した後も、保持しているもの、とされている。一方「似させ」とは「神との関係」と解し、人間は堕罪によってその関係を失ってしまったとする。

しかし、この二つに分ける解釈に対して、ルターをはじめとする宗教改革者たちは「かたどり」と「似せて」との語句を「ヘブライ語の典型的な並行法に従い、同じ意味で用いられてい

る」と考え、二つを別々に解釈することを否定し、人に於ける「神の象」は堕罪によって失われてしまったが、いまだ「神の象」の「残余」はあるとした。その結果、人間に於ける「神の象」の解釈について、プロテスタント教会にあって難問の一つとして引きずることになった。けだし、この問題は単なるキリスト教神学上の解釈論議のことではなく、人間をいかなる存在としてとらえ、人はどのように生きるべきかという、誰にとっても見過ごすことが出来ない内容を含んでいる。

×　　×

それにしても、近世に於ける人間の思想の傾向は、人間を世界の中心に据えた。つまり、人間自身を主観の立場にすえて、神を含むすべてを客観的対象として分析的に見たり考えたりするようになった。そこでの神は、客観的なものの横並びにある一つにしかすぎなくなってしまった。それは他でもなく、人間の認識理性だけが唯一確実なものとなり、さらに、認識論的理性は当然のこととして技術理性へとひろがり、現代の人間社会に王者の如く君臨することになった。まさに人間を世界の中心に据えたのである。これこそ、世俗社会であり、無神論的人間社会である。しかし、このような人間観、世界観に対して、大きく疑問が投げかけられ、不安を覚え出したのが今日の時代状況であり、理性を越えた超越の世界、宗教の世界への関心が、「こころの時代」として人々の間に生じつつある。

このような時代状況の中で、人間とはなにか、人間はどのように生きるべきか、ということを神の前で再び真剣に問いなおすことは、人間の未来にとって重大な意味をもつ問いである。バルトとブルンナーとの論争は、こうした人間状況に対する問いを含み、さらに正しい答へと導く内容をも含んでいる。勿論、それは真の宗教のあり方を問うことであり、その答えを得ることにも連なる。それ故に、あえて両者の論争を取り上げたのである。

以下、もう少し、彼らの論争が提起した問題に目を向けると同時に、そこから生じてくる新たな問いについて考えてみたいと思う。

×　　×

先に、「バルトの神認識について、その詳しい内容を十分に理解出来ないままで、バルトの信仰理解は私を圧倒した」と言ったが、その端緒は彼の「ロマ書」に於いてである。

彼のキリスト信仰は単なる聖書主義や聖書の逐語霊感説とは違う。彼の聖書に対する関わりかたは、人間の言葉である聖書ではなく、聖書が証言するところの「神的事実」そのものに開眼するという一点にあった。その一点を「聖書が証しするキリストの啓示」に彼は見るのであるが、その意味では、ただ聖書の語句を単純、且つ機械的に、更に直接的に「神の言葉」として結び付けて満足し完結するような所謂「聖書主義」とは全く違う。

バルトは「ロマ書」第一版の序文で次のように語っている。（「カール・バルト著作集」十四

巻ロマ書」―新教出版社）

「パウロはその時代の、子としてその時代の人々に語った。けれどもこの事実よりはるかに重要な事柄は、いま一つの事実、すなわち彼は神の国の予言者ならびに使徒としてあらゆる時代のあらゆる人々に語っている、ということである。昔と今、かしことここ、という差別はあくまでも顧慮しなければならない。けれどもそれを顧慮するのは、専らかかる差別が何ら本質的な意味をもたないということを認識するためでなければならない。……私は専ら歴史的なものの裏に聖書の精神を洞察しょうとした。聖書の精神は永遠の精神なのである。かつての重大問題は今日もなお重大問題であり、今日の重大問題で単なる偶然や気まぐれでない事柄は、またかつての重大問題と直結している。もしわれわれがみずからを正しく理解するなら、われわれの問いはパウロの問いであり、もしパウロの答えがわれわれを教導するなら、それはわれわれの答えとなるに違いない。

真理はすでにとく見出され
高貴な魂と魂を結びあわせた
古い真理――それを捉えよ！

歴史を理解するとは、昨日の知恵と今日の知恵とが絶えず誠実と透徹とを深めつつ不断の会話

を取り交わすことであり、この二つの知恵は同じ一つのものである。」

彼は歴史的なものを貫いて、永遠の精神、永遠の真理を直視することにのみ専心せんとするのである。その立場からすれば、「歴史的批評的な聖書研究法はそれ相当の根拠はある。けだし、この方法は聖書理解に必要な一つの予備的工作を志すものである」と言う。

さらにバルトは「ロマ書」第二版の序に於いて「『神は天にいまし、汝は地に在り』。私にとっては、この神とこの人間との関係、ないしはこの人間とこの神との関係が聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である。哲学者たちは人間の認識をおびやかすこの危機を根源と呼ぶ。聖書はこの十字路にイエス・キリストを見る」。彼は人と地、神と人とを結び合わせるその一点である「神的事実」そのことを「聖書が証しするキリストの啓示」に於いてのみ見、その事実の前に立つことをパウロに於いて、またその「ロマ書」に於いて見ようとする。したがって、「もし人々がパウロの名のもとに、表面はイエス・キリストを説きながら、実は絶対的な相対物や相対的な絶対物から成る全くの人智学的混沌を説くとすれば、それこそパウロを歪めるというものである。けだし、さような混沌こそは、パウロがそのすべての書簡の中で専ら狂猛きわまる憎悪の言葉をあびせかけた当の対象にほかならなかった。」と言う。

さらに、バルトは第三版の序の最後で第二版の内容を顧慮して、「信仰とは、望んでいる事を

確信し、見えない事実を確認することです」というヘブル人への手紙一一章一節についてのカルヴァンの注解の一部を、餞（はなむけ）として記している。「恩寵は常に柔盾的様相を呈する。信仰は土台である。すなわちわれわれの足場たりうる支柱であり、所有である。とはいえ、いかなるものを所有するのか。現存しないものを所有するのである。それはわれわれの足もとにあるどころか、むしろわれわれの霊の補足力をも越える。信仰が見えないものの証示とよばれるのも、これと同じわけである。けだし、証示とは物を呈示することであって、われわれの感覚が把握しうるものにしか及ばない。したがって、見えないものの証示とは、一見互に矛盾するが、こと信仰に関するかぎり両者は最もよく一致する。神の霊はまさにわれわれの感覚が知りえない隠れた事物をわれわれに示す。神の霊はわれわれに永遠の霊を約束する。しかもわれわれは死者なのである。神の霊はわれわれに救いの復活を語る。しかもわれわれには罪が宿っている。われわれは自分が救われたのを認める。にもかかわらずわれわれは限りなく悲惨事に圧しつぶされる。ありあまるほどの嘉きものがわれわれに約束される。しかもわれわれは専らの飢渇に満ちている。神は、われ直ちに汝らのもとに行かんと、声高に言い給う。われわれはどうなることであろうか――もしわれわれの心が希望を強くしなければ、然り、もしわれわれの心が彼（キリスト）の言葉と霊とに照らされた道をたどりつつ急いでこの世の霊のまっただ中をとおり超すのでなければ」

そして、さらに第五版の序に於いて次のように語る。

「神は人間を用い給う。
ただし壮んな人間的空語を叫く人々は
用い給わない――
神は犬を用い給うのである。
犬は鋭い鼻を今日の中に突っ込み
そこに永遠を嗅ぎつける。
それがどんなに深く隠されていようとも、
そこを離れずに嗅ぎまわり
においの跡を掘り返して朝にいたる。
然り、神は用い給う！そして私はそのようなキリストの犬になりたく思ったのであり。またすべてのわたしの読者をもこの僧団に入らせたいと思うのである。」

× ×

バルトにとって、神の言葉を正しく語ることがただ一つの願いであり問題事であった。つまり、彼にとって、パウロの言葉つまり、ロマ書を釈義することではなく、その聖書の言葉を通して神

の言葉をきき、その「神的事実」その事を自らこだまと化して語ることであった。しかしそのような生を備え与えるものはただ一事「聖書が証しするキリストの啓示」であり、その福音であった。それは人を日々新しく創造し、人の生命の確固不動の根となり、人を限りなく癒し導く力、全宇宙の前進の源なる命のたぎりそれ事体であった。ここにバルトの衝撃があり、彼の信仰者としての確かさと、「発見者たる喜び」とがある。それこそが、滝沢克己氏の語りを用いるなら、「弟子たちがただそれだけを宣べようとしたそのものの何であるかの発見」に他ならない。若き日に、バルトの神学のなんたるかも全く理解出来ないままで、（今もって同じなのだが）それでいて私自身を圧倒した当のそれこそがそれだったのである。わたしは後年それを、「命のたぎり」とよぶようになった。そこではすべての人間的な努力による一切を相対化し、塵のように無化して色あせてしまう、と同時に、すべてのものの存在意義が明確化され、有り難く受け入れせしめる「神の知恵」「神の命」であったのだ。

以上のことは、聖書をどう読むか、聖書にどう聞くかということを、私は教えられたばかりか、世界を人生をどのように見るかという、生き方の根本をバルトの信仰から教えられたのである。この一事がどれほど有り難く大切なことであったか、私は深く神に感謝してつきないのである。

× ×

以上のようなバルトの信仰理解の根幹を一口に語ったものが、すでに何度も記したとおりの

「聖書が証しするキリストだけが神の啓示である」ということになる。確かにそこで言い表されている一事は基本的に重要なことである。人間の理性や内面性に寄りかかろうとしないで、超越性を強調し、ただ信仰のみに立つことは、聖書の信仰、従って宗教改革の信仰を完結させるものにとどまらず、人間理解、世界理解に於いて正当性を示したものであると思う。にもかかわらず、より厳密に問われなければならない幾つかの事柄がある。その一つは、聖書が証しするキリストだけが啓示であるという告白が持つ問題性であり、今一つはその手前の事として、それを神の啓示だとどうして知ることが出来るのかという問題である。後者についての論争がバルトとブルンナーとの間でなされたことは、先に少し記したとおりである。

× ×

私がバルトやブルンナー等に関心をもつのは、彼らの神学に対する単なる興味からではない。一人の信仰人として、またその信仰を語る務めに召された一介の伝道者としての求道による共感と問いなのである。

いかなる場合に於いても「求道」は独善であってはならない。ひとりよがりの思い込みの自律、または他からコントロールされる他律であってはならない。求道は真実の自己に開眼するための修行であるはずだ。そのためには絶えず自律を排し他律を越えていかなければならない。即ち、求道はたえず自己の生のあり方を固定化から開放し自己自身を否定しつづける作業である。そこ

においてのみ宗教の求道者は真の求道者たり得、そのような求道の生へ、その者をおし出していくものが真の宗教であり、信仰なのだとおもう。その意味で宗教的生の固定化は、求道の放棄であり、その宗教の死、その信仰者の命の喪失だと言えないだろうか。このような求道の姿を使徒パウロは次のように告白している。

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕えたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。だから、わたしたちの中で完全な（自身がキリストに捕らえられているという信仰に円熟している）者はだれでも、このように考えるべきです。（　）内は筆者による。　―フィリピの信徒への手紙三章十二節以下―

×　　×

私がバルトから得た大切な一つはすでに何度も言ったとおり、イエスをたんに倫理的な観点から見て、その生き方に人間の理想を求めたり、またキリスト教を宗教的な感情や経験によって理解し、共感する人間の側からの意識に根拠を求めてはいけないということであった。神は人間に

とって絶対他者としてあることを示すことによって、彼は聖書の神を正しく語り、当時のキリスト教会または思想界に衝撃を与えた。たしかに、この一点はどれほど強調してもよいと思われるほど大切なことである。ここのところを曖昧にしてしまうと、忽ち様々な偶像が人間の精神の理想と心の憧憬と物質的欲望とによって生み出され、それらが幻想としての観念となってはびこり、人間は救いがたい混乱におちてしまう。事実、今日の時代状況は宗教を含めた他のあらゆる分野でその悲劇が起こりつつあると言えよう。その意味でバルトの存在は歴史的に重要な意味があったと言える。

×　　×

にも拘らず、バルトの信仰理解に於いて明確化しなくてはならないことがある。それは、人間にとって絶対他者としての神に人は何処で出会うことが出来るのか、ということである。彼はそれを、聖書が証するキリストの啓示によると言う。この場合よく注意しなくてはならないのは、彼は「聖書による」とは言わず「聖書が証するキリストの啓示による」と言う。つまり、イエス・キリストその事こそが神の唯一の啓示なのだと言うのである。

×　　×

ここに二つの問いが生まれてくる。一つは、神と人との接点という問題。他の一つは、イエス・キリストその事だけが神の唯一の啓示であるというキリスト絶対主義という問題。

神と人との接点または結合点の問題は神の啓示が何であり、啓示をどのようにして認知するのかということである。この問題は古来さまざまな論議がなされてきたことだが、ブルンナーがバルトに向かって投げかけた問題でもある。両者の論議の詳しいことは専門家の書物で学んでいただければよいと思うが、私の問題として関わる限りで言うなら、ブルンナーが言うことは、人間はたしかに神の啓示を十分に理解出来る能力は失われているだろうが、いまだそれを認知できる部分が人間に残っているのではないか。そうでないと神の啓示を啓示として認知出来ないのではないか。という所謂、神の像の残存如何ということであった。それは、神と人との接点又は結合点が人間の側に残存しているのではないか、という提示であった。

×　　×

ブルンナーがこのような問題提起をした背景には、聖書的な真理は「われ」と「なんじ」の出会いに於ける決断においてみずからのものとされるのであり、そこに於いて神と人、人と人との間の接点があるとのだという彼の宣教的課題の基礎づけとしての神学がある。この点についてもう少し詳しくいうなら、人間は確かに神との関係をその罪のゆえに実質的には失ってはいるが、人間はなおも人間としての言語を用い、語りかけに応答する責任を負うているというところに神の像が形式的になお残存しており、その限りに於いて人間は「われ」と「なんじ」との出会い、また、応答するという決断のそこに、キリスト宣教ということが成り立つのではないか、という

のである。

×　　×

このようなブルンナーの宣教的課題への基礎づけへの思いは、一介の伝道者としての私自身の内に強く響いて来る。なぜなら、一人でも多くの友と共にキリストの福音に与かりたいと願っており、周囲にいる人達と神、または信仰人としての自分と他の人達との接点を祈り求めているからである。しかしバルトはこのブルンナーの問いに「それは違う」と言う。そして、神と人間との接点などということが問題なのではないのだ、とブルンナーを突っぱねたのである。

×　　×

バルトがブルンナーの問いを強く否定したことは基本的に正しいと思う。なぜなら、ブルンナーの問いの内には人間と神との関係に於ける、人間が陥りやすい一種の「魔」がひそんでいるからである。これは、バルトとブルンナーという神学者の神学的な議論のこととして済ましてしまってはならない。彼らの間の難しい神学論は私たちには無縁であっても、そこにひそんでいる問題を見過ごしてしまってはならない。

×　　×

これは、所謂神の「啓示」の問題であり、その「啓示」をどうして認知するかという問題を含んでいる。啓示とはすでに言ったように、本来隠されている神が人間に自己自身を開示すること

である。そして、人間の理性や感性や思惟などの能力が神との接点または結合点と成り得ると説く立場が、所謂自然神学と称されるものである。このような問題は古来、信仰と理性、恩寵と自然、神学と哲学等の関係でさまざまに論じられて来たこともすでに述べたとおりである。その意味で、バルトはその生涯をかけて「自然神学」なるものと戦ったのである。そして、自然神学の内にバルトは、私の表現で言えば、「魔」を見ていたのである。別な表現をすれば、自然神学の延長線上に、人間を神とする幻影の存在を見たのである。自分を神とする、ということは正に「魔」以外のなにものでもないと思う。すべての悲劇はここからはじまるのである。つまり人間自我の絶対化こそ諸悪の根源だと言えないだろうか。だが、今や世界は此の「魔」に傾きつつあり、キリスト教以外の宗教の多くはもちろん、キリスト教界の大勢もそのようになりつつある。それは人間の軽薄な堕落だと言えまいか。

×　　×

バルトがブルンナーに「それは違う」と言ったことは正しかった。在る人間がいかなる意味においても神になることはない。この場合の「在る人間」とは、自我絶対化している人間ということである。

×　　×

それにしても、ブルンナーが提起した問いのすべてが間違いとは言えない。バルトは聖書が証

するイエス・キリストこそ神の啓示だという。それは、イエス・キリストに於いてのみ人間は神の啓示に接することが出来る、というキリスト絶対主義ということである。それは他の一切に於いて人間は神に接することが出来ないという、極めて排他的な真理主張となる。ブルンナーの問いの有効性はここにある。

×　　×

一般に目に見える「もの」には「形」があり「働き」があり、そして「構造」がある。その形を「体」、働きを「用」と言い、さらに構造を「理」と言い表すことも出来る。

例えば、家という「もの」にはさまざまな形がある。それを「体」と言おう。さらに家には人間が便利で快適な生活をするための機能が必要である。それを「用」と言おう。そして、家には外側からは目に見えない土台と骨組みとしての構造がある。それを「理」と言おう。とすると、家というものは、「体」と「用」と「理」から成り立っているが、この三つは共に、家に求められる必要なことである。

人が家を建てるとき、外見の形である「体」だけ、つまりそのデザイン性の雰囲気だけを大切にし、生活するための便利さや快適さである「用」を考えず、さらに、外見だけでは知ることが出来ない構造、つまり「理」を無視してしまうなら、家としては役立たなくなる。その意味で、家を建てるとき、その「形」の雰囲気だけに惑わされてはならず、また、便利さだけの「用」の

みを考えてもならない。更に、その内部構造が家としての強度を持った「理」にかなった建築でなければならない。とすると、家が家であるためには「体」と「用」と「理」とが共に望ましく備えられなければならないが、とくに「理」である土台を含めた内部の構造がとても大切である。これは、家についてだけでなく、すべての事柄において当てはまる。勿論、信仰についても同じことが言える。

×　　×

宗教や信仰を「気分」のことだけにしてはならない。気分とはその人の快さとか不快さのことである。さらに気分とは雰囲気のことであり、それらは極めて情緒的且つ感情的な事柄である。「とても感激しました」「感動を覚えました」「なんだか気分がすーとするのです」等々。信仰がそのような情緒的または情動的な事柄、または心理的な感性の事としてとらえられるなら、それは家を建てるとき、外見の形としての「体」だけの情動によって決定するのと同じである。

×　　×

また、宗教や信仰を「有用性」の面からだけ見てはならない。有用性とは、自分の生活にどれほど役立つかという実利的機能性のことである。「信仰心を持っていますと苦しい事も忘れてしまうのです」「信じて祈っていますとすべての願いが不思議に叶えられるのです」「病気が治りました」「お金が沢山儲かるようになりました」「他の人よりも立身出世ができるようにしても

らえます」等々。信仰をそのような魔除けや利益誘導の幸福製造手段として有効に機能するものと見るなら、その人は家を建てるに便利さと快適さだけを求める「用」の人と同じである。

×　　×

家を建てるとき最も大切なのは、その家の内部構造である。構造とは、全体を作っている部分部分の関係や、個々の部分の作られ方のことである。言うならばそれは土台と骨組みの確かさである。激しい風雨や地震等に耐えうる力学にかなった構造に成っているということを、先に「理」と言ったが、宗教や信仰に於いても「理」をしっかり確認しておくことはとても大切である。勿論「理に勝って非（あやまり）に落ちる」と言うことがあってはならない。が、「理」を無視して「体」と「用」だけを重んずるだけでは、その信仰は多分に一面的であり矛盾と独善におちいる危険性がある。事実そのような矛盾に気付くことなく、傍から見ると明らかに独善的であると思えることが信仰の名において平気で罷（まか）り通っているのを見受ける。近年我々の身近に起こった反社会的な宗教集団の狂気などその最たるものである。

×　　×

何事に於いても、与えられるままに受け入れてはならないと思う。自分の手の平に乗せ、しっかりと見つめ、その理を確かめ自覚的に受け入れるべきである。しかし、「信仰は信じることであって理屈ではない」という命題を金科玉条に振りかざし「理」を拒否する人がいる。そのよう

な人々の信仰は時として、知性の限界を真に乗り越えて、遂に到った「信」でなく、妄信の類に陥っている場合が甚だ多い。その初めから「信仰は信じる事であって理屈ではない」という命題を安易に出発点となし、したがって、それ以前は無く、それ以後だけが教条としてあるだけである。家の事で言うなら「体」と「用」と「理」とは一見あるように見えても、その実「理」については、すべてが妄目的受容なのである。言うなら家の構造を自分の目で確かに見て信じ受け入れたのではなく、すでに出来上がっている構造即ち「理」を確かなものと思い込み受入れただけのことなのである。とにかく、私が問いつづけて来たことの根底にある大切な一つは、私に与えられた信仰の「理」を、自分の手の平に乗せてもう一度見直すという作業であり、その作業によって、自覚的な信仰告白とならしめたいと願った。このような私の基本的な態度をもう一度ここで確認しておく。

×　　×

さて、バルトの信仰の基本的な立場は、「聖書が証しするキリストが神の啓示である」ということであった。この立場は正統的キリスト教と言われる教会一般に於いて多少のニュアンスの違い（例えば、イエス・キリストの出来事に於いて神が人間救済のために唯一回限り行為した。又、イエス・キリストの十字架上の贖罪行為に於いてのみ人間は、罪から救済される等）はあっても、それらはキリスト教信仰の中心的教義、または聖書の福音として大前提にある教理である。先の

家のたとえで言えば、構造としてある「理」なのである。この基本的な信仰告白はそれ自体キリスト教会内では有効であっても、それを一般的普遍的神理解として位置づけるとき、忽ち問題となる。事実、キリスト教会は聖書が証しするキリストを神の啓示としない宗教や人々を、神を未だ知らない宗教、又人間として排除し、抹殺さえして来た。そのためにさまざまな悲劇が歴史の上に繰り広げられて来たことは衆知の事実である。

×　　×

今、私はキリスト教の教義の正否を語っているのではなく、その教義が持っている問題性とそれに関わる信仰人の在り方に目を向けているのである。例えば、バルトの信仰に於いて、私にとって疑問となる一事は、聖書が証しするイエス・キリストだけが神の啓示であり、それ以外のどのような真面目な宗教といえども、真実の神の啓示とはならないと言う立場の持つ問題性である。

×　　×

聖典宗教であるキリスト教が聖書を絶対とすること、またイエス・キリストとその出来事を中心にし、それを絶対とする信仰はそれ自体当然の事であろう。しかし、問題は、聖書の何をもって絶対とし、イエス・キリストとその出来事への信仰の絶対性をイエス・キリストの何処に見るのかということである。

×　　×

キリスト教会にはファンダメンタリズム（根本主義又は原理主義）に立つ教会と信仰とがある。彼らは旧約聖書と新約聖書の一点一画が神の霊感によって書かれた完全な神の言葉であり、創世記から始まる年代を計算すると、神の天地創造の時期は紀元前五千年頃になるというような徹底した逐語霊感説という聖書主義に立っている。勿論その教義内容も唯一の神の御子イエス・キリストの十字架の贖罪による人類救済絶対主義である。しかし、今日の日本の大方のキリスト教会は、ファンダメンタリズムには同調しない。にもかかわらず聖書とそこで解釈された教義を唯一の聖書的真理とし、そこを出発点とするが、ある時は聖書的であり、ある時は非聖書的であるような曖昧で矛盾した対応の仕方を、異教的な伝統や日常的な習慣との関わりに於いて、又は文化や歴史を論ずる折りに、平気で行っているのを見る。例えば、日本に於ける他宗教や文化的に貢献した歴史的な人物を語る場合に於いてもである。問題は、その矛盾、また曖昧さを自分の信仰の在り方に見て、それをどのように克服するのかということを、聖書とイエス・キリストの内から明確な答えを得る「理」の作業をしなければならない。結局、私にとってバルトが残した問題はここにあった。

×　　×

先に「体」「用」「理」という観点からものごとをとらえ、自分の信仰を少し語ったが、その場合「理」についての吟味はとても大切なことなので、ここでもう一度述べておこうと思う。

×　　×

例えば、自動車に於いての「体」とはその形でありデザイン性のことである。人は「かっこよい自動車」「美しい形の自動車」を求める。また「用」とは、その機能性のことである。人は「運転し易い自動車」「快適な機能と装備がある自動車」を求める。しかし、いくら「体」が良く「用」が備えられていても、エンジンを含めたボディが「確かな構造」、つまり安全の「理」にかなっていなければ、走行中に分解するかも知れない、それはもはや自動車ではない。

では、「理」としての自動車の構造はどのようにあることが望ましいのだろうか。細かい力学的なことは私には分からないが、確かなこととして言えるのは、「理」の基本は、「自然」であるということである。自動車の場合、空気抵抗をより少なくし、全体の構造に安定性を備えた強度を持っていることであろう。それは、衝撃や空気抵抗に対する強度ではなく、衝撃を和らげ抵抗に即する構造であろうとすることだろう。

つまり、「理」とは「身構える」ことではなく、「極めて自然に即する事」なのである。だから自動車の理想は「空気のようになり」「空気となって流れる」ことではないだろうか。

×　　×

おそらく、人は「理」というとき、「理屈」と受け取るだろう。しかし、単なる理屈は、人間の分別が生み出した観念の産物である。その観念で物事を規定しようとするから、本当の事が見

えてこない。近代の科学主義の欠陥もここにある。

私たちは、なにごとも自分の観念でとらえて、そのものを知ったと思い込む。自分自身について、他人について、そして一切の物事について、勿論、神や信仰についても同じである。そこには必ず「自分の理屈」があり、その理屈を根拠として語り、行っている。だから、自分の立場を固守して、他人を批判する。「わたしの考えは……であり、あなたは間違っている」と叫び、ときとしてそのような両者が激しく議論する。だが結局、そのどちらも自分の観念で空しい議論をしているだけであり、ただ自分が造った幻想の世界の戯言を交わしているにすぎない。正義を語り、平和を語り、愛を語り、さらに、神を語る場合に於いても、そのようなことがある。

× ×

私が言う「理」とは、人の観念が生み出した「理屈」ではない。観念は、その人の意識が生み出した認識によって形成される。「その人の意識」はその時代や個人的条件によるが、いずれにしても限られた人間性によって生み出された観念の産物である「理屈」は、結局「主観的幻想」なのである。

しかしわたしが言う「理」とは、人が生み出す観念からすれば「無」としか言いようがない。それだからこそ、先の自動車に於ける「理」とは、「極めて自然に即すること」「空気となって流れること」と言ったのである。

×　　×

人は、先に述べた家や自動車にかぎらず、自分自身を含めたすべての事柄を見たり語ったりするとき、そのものの事実に即することなく、自分の観念で捉え、それを言葉に置き換え、それを実在とする。このことが如何に間違ったことかを私に気付かせてくれた出来事が、すでに語った教会の二階での体験であった。そこで教えられたことは、「樹」と「雲」と「空」と「私」とが別々にそれ自体として存在することは、私の観念が造りだした幻想であって事実は、それらすべてが「一」であり、「無」なのである。「無」とは「有無」の「無」ではなく、「絶対の無即絶対の有」という「無」のことである。その「無」こそ、まさに「理」なのである。

このような言い方をすると、多くの人は何を言っているのか全く理解に苦しむにちがいない。なぜなら、「樹は樹であり」「雲は雲であり」「自分は自分である」という自分の思い込みから、一歩も出ず、その観念に留まって物事を見たり考えたりしているからである。

しかし、そのような分別的観念をポイと捨てるなら、忽ちにして、ものごとの真実が見えてくるようになる。事実このことをイエスは次のように言われた。

心の貧しい人（分別的な自分の観念をすっかり捨て去った人）は幸いである。天の国（神の命の躍動）はその人たちのものである（深く知る者となる）―マタイによる福音書五章三節―

ここでイエスが提示されることは、自分の分別でものごとを見ないで、素直にそのものをそのものとして見なさい。ということである。以下のイエスの言葉も同じ事が提示されている。

自分の命を救いたいと思う（自分の分別によって自分を立てようとする）者は、それを失う（神さまの命又は、自分の救いを失う）が、わたしのために命を失う（神の命の躍動に自分を委ねる）者はそれ（神の命の躍動）を得る（与かる）。―マルコによる福音書十六章二五節―

他にも次のように言われる。

あなたがたは（自分の分別を振りかざさず、ただ神の真実を真実とし、それに即して）「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、（それ以外に自分の思いで分別しようとすることは）悪い（真実に反する）者から出るのである。（　）内は筆者による。

―マタイによる福音書五章三七節―

尚、聖書が「悔い改め」ということは、何事も観念的な分別でとらえようとしていた自分の誤

りを、ものごとの真実に目覚めることによって自覚することである。

その意味では、教会二階での体験は、私に深い悔い改めを生ましめた出来事であり、「然り」の世界への開眼の決定的な契機だったと言える。

×　　×

はたして、わたしたちは「聖書」をこのような真実から見ているだろうか。ひょっとすると、「聖書は神の言葉」というすでにある観念を先行させ、それを根拠として聖書を見ているのではないか。事実、先に述べた「ファンタメンタリズム」に立つ信仰の方々にそれを見る。その人々は先述したごとく、聖書の語句の一つ一つを神の霊感によって書かれたそれ自体直接的に神の言葉、真理そのものとする。

また、一方に「聖書主義」という立場の方々は、教義を聖書の語句のみから引出し、教会の歴史の中で形づくられて来た神学的な教義を非聖書的だと拒否する。一般の正統主義キリスト教会も基本的には同じである。更に、宗教や信仰を人間の宗教意識に根拠を求め、聖書をそのような観点から理解しようとする自由主義神学の立場の人達もいる。

これらの方々に共通することは、聖書は真理を保証する唯一の神の言葉であるという聖書絶対主義であり、聖書からの出発だとする立場である。このような立場は一見、とても聖書的であるように思われる。しかし、無条件に、聖書は誤りなき神の言葉であり、従って、神の言葉と聖書

との直接的同一性の聖書理解には、聖書の文字の神格化があり、その中には律法主義やパリサイ主義、教条主義におちいる危険性を秘めている。

×　　×

聖書の偉大さは、直接的な神言というところにあるのではなく、神または真理を指示するところにある。私がバルトから学んだ聖書についての大切な一つはここにある。即ち、彼は、「聖書は、語られて、記録された神の言葉」として受け取り、聖書の言葉に従って生きることが救いに到達するのではなく、聖書は、「人間に語りかける神の言葉の出来事」であり、従って、その神の語りかけに聖霊の働きかけにより聴従し人間の信仰による応答するそこに、聖書が神の言葉であることが、その人に生じ、神の働きに参与出来るのだと言う。

彼の聖書理解の根底には、歴史の根底に於いて働き給う神を創造的且つ躍動的に見ている信仰の確かな眼力がある。更に、彼の信仰理解、聖書理解の底に、先に述べた「理」がある。彼の神学的論述の細かなところの理解は私の能力では及び難い。だが基本的には共感し多くの示唆を受ける。しかし、なお問題として残る一つの事柄がわたしの内から突き上げてくる。

×　　×

電車に乗って遠くを眺めていると、見えている景色が動いているように思う。しかし近くを見ると、動いているのは電車だとわかる。同じように自分の外だけに目を向けて生活していると、

移り変わっているのが自分自身であることに気付かない。

その昔、僧達が集まり、風に揺られて動いているのぼり旗を見て、動いているのは旗なのか、風なのかと盛んに議論していた。その様子を眺めていた一人の旅の僧が、ぽつりと一言「動いているのは、あなた方の心だ」と看破した。一同しゅんとなってしまったという話しが禅にある。

×　　×

世間は自分の外ばかりを見て、自分の幸不幸の原因が、それら外にある人や物によると思う。しかし宗教は、他を批判する前に自分自身を深く見据えようとする。

見据え方には二通りある。一つは、自分はどのように生きれば善いのかと問う生き方であり、もう一つは、自分の存在の根源は何なのかと問う生き方である。

どのように生きれば善いのかと問う生き方は、社会的、道徳的に悪を行わず、人々に喜ばれ神にも善しと認められる善行にその者を向かわせる。つまり、そのように問う生き方は倫理的である。

一方、自分の存在の根源は何かと問う生き方は、自分の存在、物事がよって起こって来る根っこへと関心を向かわせ、すべての存在を根本的に規定しているそれは何なのかを見極めようとする生き方である。そのような生き方は存在論的だと言える。

×　　×

倫理的な生き方と存在論的な生き方が別々にあるのではない。心ある人は、何時もより善なる生き方を求めている意味で倫理的である。と同時に、自分の精神的な命の根っこを密かに求めている意味では存在論的だと言える。それらに共通している事は自分の命の確かな手応えと命の故郷（ふるさと）を得て安心したいと願っていることである。

自分の生き方について、倫理的な方向に関心を持つ者と、存在論的な方向に関心を持つ者とがあるのは、ただその人がどちらに重点をおくかの違いだけである。つまり、それは自分探しの方法に於ける比重の置き方の違いであって、正誤の事ではない。

それにしても一般にキリスト教は倫理的方法であり、仏教は存在論的方法にその傾向を持つと言われている。その結果、キリスト教は社会的実践をする宗教とされ、善行を旨とする道徳宗教のように一般に思われてしまった。一方仏教の方は自分を深く探究する己事（こじ）究明という意味で哲学的だと理解され、仏教は哲学的宗教だと思い込まれてしまった。

×　　×

日本に於けるキリスト教の場合、明治時代の初期に入って来たキリスト教は倫理性の強いものであった。それは「宗教」と「倫理」との違いが明確でないままに倫理的に受け入れられたと言える。それは、入ってきたキリスト教が一般的に禁欲的な倫理を伴ったもの、例えば酒や煙草をのまず、愛に満ち人に対し悪をなさない清い生活をする事などを説く所謂ピューリタニズムと称

されるキリスト教であった。ちなみに、今日の長老派教会、バプテスト派教会、会衆派教会、クエーカー派などの多くはこのピューリタニズムに含まれる諸派である。

一方、受け手としての当時の日本の世情は、三百年つづいた徳川幕府政権が崩壊し、欧米に目を向け近代化が始まろうとしていた時期であった。そのような社会に於ける中産階級として構成されたのが没落武士であった。そして彼らの精神的支柱は儒教を基盤として武士道の倫理であったことは皆の知るところである。

この儒教と結びついた武士道の倫理性と入ってきた当時のキリスト教（ピューリタニズム）とが共鳴し合い、共感したことが、一層キリスト教を受入れ易くしたのである。つまり、儒教的倫理観とピューリタニズムの禁欲的倫理観とが共鳴し合ったのである。

それらの結果、キリスト教は知識階級の人達の宗教、人道主義を唱える人達の宗教、つまり中産階級の人達のハイカラ宗教ということになり、勤労者階級には縁のない宗教という誤解を日本人に植えつけてしまった。当時のキリスト者となった人達を見てもその事がよくわかる。内村鑑三もその代表的な一人だと言われている。

しかしその後、欧米に於けるキリスト教は聖書の福音理解の仕方に反省がなされ、単なる道徳的理想主義的倫理宗教としてのキリスト教から紆余曲折しながら新約聖書に則した福音的キリスト教へと脱皮していくことになる。が、概してキリスト教の基本は倫理的であると言える。

×　　×

それにしても、私の場合、その求道の方法は、どちらかと言えば存在論的であることは先にも少し述べた。その意味では、キリスト教に倫理的な関心から接近したキリスト者とは少しその問い方が違うように思う。問い方が違えばその答え方も異なって来るが、それは本質的なことではない。真理（真実）に対する接近の仕方が異なるだけで、究極に於いて開眼される真理は同じであるし、同じでなければ真実とは言えまい。

新約聖書に於けるイエスや使徒パウロを見ていると、一見倫理的な問いがなされているように思うが、もう一歩踏み込んでその教えに目を凝らすとき、そこで提示されている答えは極めて存在論的である。つまり、イエスは世界を問い人生を問う者、つまり求道の者に「神の支配」という根源的な命のたぎりを提示し、使徒パウロは「復活したキリスト」そのことに根源的な命のたぎりに開眼させられた。結局イエスも使徒パウロも全ての根源的規定としての命のたぎりを生き、提示し、同時に世界の在り方人間の生き方を示したのである。

×　　×

さて、求道途上で、私は直接又は間接に沢山の霊的知恵を多くの方々から頂戴してきた。と同時にいろいろな疑問も生まれ、その問いを通して一層求道へと導かれた。その場合、私は単なる評論家のように対処したのでなく、自分の求道の故に、牧師としての立場も省みず、愚直にその

問いにぶつかって行った。その為に時として託された教会を結果的に混乱させ、私の求道の説明不十分の故もあってそこに集う教友の信仰に不安をもたらしたとしたら申し訳ないと思う。但し、私個人の信仰が「変節」したのではない。それまで固く守って来た教えを捨てたり変えたのではない。かえって求道を深化させ、イエスや使徒パウロが提示する福音の神髄に目覚ましめられ、福音理解を純化させていただいたのだと思い神に感謝している。それにしても、さまざまな問いの山川を越えて私の求道に理解と共感を覚えてご一緒してくださる教友がいることは有り難いことだと思う。

Ⅳ　キリスト教の絶対性について

さて、その問いの一つにキリスト教の絶対性という事がある。キリスト教の絶対性への問いとは、キリスト教の唯一性の否定のことではない。いずれの宗教信仰にとってそれは伝統的に、他に同じものがない意味で「唯一」である。しかし、キリスト教会が世界の他の宗教と比較してその教義、その救済等の内容が優越しており、絶対的なものであるという意味での「唯一性」を説くならば、他の宗教はすべて偽りの宗教ということになる。それでは、キリスト教は排他的絶対

性を唱える宗教となる。更に、他宗教の人達をキリスト教に改宗させなければならないと熱心に伝道するに及んでは独善も甚だしいと言えよう。それならば、同じような独善的使命感に燃えた宗教に出会うとき、そこでは凄惨な戦いが生じることになる。問題は、他宗教を非難攻撃することではなく、聖書の説く福音を深く省みることによって、キリスト教自身がその唯一絶対性を止揚することである。止揚するとは、絶対性を否定克服することによって一層確実な真理性に立つということである。言うならばその場は、他の何かを否定することによって自分がその場にたつのではなく、すべてのものをひっ抱えることによって、全てのものの根底の場に立つ事、ないしは、すべての窮極の場に立つということである。聖書の世界、とりわけイエスやパウロの世界にはその「場」が命たぎり、躍動しているのである。そこをイエスは「初めであり終わりである」と提示された。また、「何と、幸いなるかな！」と歓喜された。

×　　×

「キリスト教の絶対性」についての疑問は、一部の熱狂的排他的なキリスト教徒達は別にして、今日こころあるキリスト教徒は当然のように持っている。特にいろいろな宗教がわりあいに軋轢もなく併存して来たという伝統がある日本に於いては、一神教による絶対性を標榜するセム系に由来するユダヤ教やキリスト教、イスラム教が持つ信仰の排他性には、ことの善悪は別にして、その宗教の有り方に疑問というよりも、むしろ、一般的には不安をいだいているように思う。ま

してや誠実なキリスト教徒は、その信仰に於いてこの矛盾をどのように克服すればよいのかと苦悩しているようにも思われる。私の場合もこの矛盾がいつしか大きくのしかかって来るようになり、いかにこの問題を克服すればよいのかと真剣に問うようになった。

×　　×

それにしても、キリスト教の絶対性に対する問題提起は、十八世紀のヨーロッパに於ける人間理性の優位を掲げた啓蒙主義時代、さらに十九世紀の無神論的立場からの宗教批判等においてなされて来たようだが、更に二十世紀初頭に於いては、キリスト教会内部の歴史主義的神学の立場からキリスト教の相対化が提唱されて来た。

また、私の青年時代にはシュウペングラーの「西欧の没落」やトインビーの「歴史の研究」「試練に立つ文明」などの書物が日本語に翻訳され人々のあいだで広く読まれ、それらを通してヨーロッパ文化の衰退が文化史的立場から論じられた。それに伴い当然の事としてキリスト教の絶対性の動揺が雰囲気として一般にもただよい、私の内にも予感のようなものとしてあったが、当時はそれほど自覚的に意識してはいなかった。

×　　×

しかし、先にも述べたように私のキリスト教信仰理解に決定的影響を与えたのは、当時の神学的風潮として支配的であったカール・バルトの福音理解に影響を受けた教会を通してであった。

カール・バルトのキリスト教理解の基本は「聖書が証するキリストの啓示」が第一義的なことがらであって、所謂「キリスト教」は彼にとっては歴史的に現れた一つの宗教にすぎない。また、「聖書」も彼にとっては決して究極の事柄でもない。彼にとって第一義的なことは、イエス・キリストに於ける啓示その事自体なのである。ここに彼の神学が「キリスト論的集中」などと言われる理由がある。彼の神学の詳細についてはすでに何度も言っているようにわたしが解説出来る立場ではない。が一つ言えることは、彼は近代主義的プロテスタントキリスト教が、宗教から神の啓示を理解したり、また、宗教と神の啓示とを同一視することで、キリスト教こそ、その啓示の唯一の宗教だと、キリスト教の絶対性に立つ立場に対して、それは違うと言う。そして彼は、啓示から宗教を理解することに於いて、キリスト教絶対主義を正したのである。このようなキリスト教理解は、私に宗教一般、特に「キリスト教」に対する自由で正しい信仰の基本的態度を教えてくれた。これには深く感謝している。

×　　×

しかし、結局バルトに於いては、「聖書が証しするキリストの啓示」が絶対的なものであり、「聖書が証しする」ということが明確にされず、突き詰めていくとやはり「聖書のキリストからの出発」ということになり、聖書のキリストから出発しない宗教は未だ真実の宗教とは言えないとする立場に陥ったのである。このようなバルト批判に私が最初にふれたのは滝沢克己氏の「カ

ール・バルト研究」という書物の「バルト神学になお残るただ一つの疑問」という文章においてである。此の書物との出会いは神学校に在籍していたとき、ふと立ち寄った古本屋においてである。バルトに師事した滝沢氏が師に対して尽きない感謝と賛辞とを抱きながら、なお残る師への問いを記した文章である。私はこの文章を通してバルトというお方の偉大さを感触として教えられ、同時にそこに潜む問いを同時に感じさせられた。今になって「滝沢克己著作集2」に収められて出版された文章を何度も読みかえし、さらにその後に記された彼の書物に接して、滝沢氏が師になげかけた問いの何であったのかということを少しは理解できるようになったのではないかと思う。

×　　×

それにしても、今世紀最大の神学者としてその業績を評価されたバルトも一九六〇年代後半頃からその務めを終えた人としてみられるようになったと言われている。神学の業はその時代時代にキリストに於ける啓示の真理を深く問う作業として聖書による信仰の基礎付けの学として重要な役割を担っていると言える。その意味でその業にたずさわれる方々には、その内容如何にかかわらず敬意をはらわなければならないと思う。しかし、そのような神学もその任を終えれば次にその務めを譲らねばならず、それ自体絶対的なものでないことは当然であろう。

×　　×

バルト神学がその主役の位置を次に譲り渡すことになった経緯については、専門家でもない私などにはわからない。しかし、感じとして言える一つは、キリスト教の絶対性が深く問われるようになったことにあるのではないだろうか。

一九六〇年代に入って、それまでとは違うかたちで「キリスト教の絶対性」が問われ出して来た。つまり、キリスト教の内外の一部の者の問いとしてではなく、キリスト教の内部、しかも、プロテスタントキリスト教やカトリックキリスト教の立場の方々が、言わばその信仰を二十一世紀に向い普遍的真理として明確化するための求道的作業として真剣に問い始めたということである。

その理由は、キリスト教を基底にした欧米の政治、文化、経済等がその指導力を失ったということがあり、さらに、高度な技術と産業の発達により、情報や交通、そして諸文化交流の世界的な広がりが生じ、異文化及び異民族との共存共生が必然的に求められて来たということである。つまり、そこでは西洋とか非西洋、東と西、北と南といった分け方やその意識は通じなくなったという現象が起こっているということである。そのような中で、キリスト教の唯一絶対主義は異文化異民族の精神的な基盤としての宗教を否定する独善と帝国主義的暴挙として非難すらあびるようになって来た。この問題はキリスト教以外、例えばイスラム教世界にも又一部の疑似宗教的国家の在り方に於いても見られることは私たちのよく知るところである。

とすれば、「キリスト教の唯一絶対性」を問うということは、信仰の理屈の事ではなく、キリスト者はどのように生きればよいのかという、信仰人としての態度決定が求められるノッピキならぬ自分の生き方の問題なのである。その意味で、「キリスト教の絶対性を問う」ことは、キリスト者にとって厳しく自分自身の信仰と生き方を問う作業でもある。ひょっとすると、この問題をキリスト者は、曖昧模糊として来たのではないかということを私自身密かに反省している。その意味で、ここに述べることは他人事ではなく自分がその聖書信仰に於いて、この問いにどのような態度決定をするかという事柄なのである。この問題に対して私の信仰態度を述べる前に一般論を少しだけ記しておこうと思う。

それにしても、「キリスト教の絶対性を問う」ということは、キリスト教徒がよって立つところの信仰の中心、つまり「宗教と啓示」の関係を問うことであって、注意深く問うていかねば、単なる自虐的な作業となり、聖書とキリストの真理性を見失うことになりかねない。

× ×

最近出会った何人かの若い牧師から聞いた言葉が印象深く私の内に残っている。熱狂主義的伝道者のもとに居る方は、「最近キリスト教とは何なのか分からなくなってしまいそうです」と言い、また、「教会の説く福音と、現実の教会の在り方にいろいろ矛盾を感じることがたくさんあります」と語る人もいた。さらに、「聖書、聖書とことある毎に言われる方が、その実、聖書や

イエスの本当の世界を知らないままで、ただ聖書の言葉をふりかざしているように感じるのです」と語って下さる方もあった。また、「牧師さんは教会の人数合わせには悩んでも、福音の本質と現代の時代状況との関わりで深く問題意識をもっているのだろうか」と、厳しく問いかけてくる方もあった。勿論、世俗化の甚だしい今の時代の中にあって苦闘しつつ真に福音伝道に励んでおいでになる教会人が多くおいでになることは言うまでもない。

とにかく、「キリスト教の絶対性」についてご一緒に考えて行きたいと思う。

× ×

「キリスト教の絶対性」を問うとは、イエス・キリストに於ける啓示を問うことである。

× ×

啓示とは一般的には、人間にとって知る事が出来ない神ご自身の自己開示のことである。それは神が幽霊のように現れることではなく、人には隠されている神の秘儀、例えば神に属する性質や人に隠されていた計画、又は神との関係にある人間の何であるか等を、神に使わされたものによって神が自ら開示されることである。このような啓示を聖書は「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったこと」「隠されていた、神秘としての神の知恵」と示している。（コリントの信徒への手紙Ⅰ二章六節以下）

× ×

神の知恵である啓示のキリスト教に於ける内容を集約して言えば、神は愛により、人と世界とを創造されたが、人は神に背き裁かれ滅ぶべき道を歩み続けた。しかし神は人間を救うべく旧約聖書に於いて準備されたが、時が満ちて遂に神は救いの御手を人間に向かいイエス・キリストに於いて決定的に歴史的な出来事として起こされた、ということになる。その中心は、罪の中で滅び行く人間に向かい、神がイエス・キリストの生涯と十字架の死と復活との出来事を通し、まったき愛と恵みをもって救済される。そして再びキリストが来たり給う世の終わりに於いて信ずる者だけが救いの完成に与かることが出来るということである。これらの教えは、専ら新約聖書にその根拠を持っている。

×　　×

以上のキリスト教の立場は、当然次のような帰結となる。先ずイエス・キリストの出来事に於いて神は決定的に自己開示、即ち啓示をなされたということ、それは同時に、イエス・キリストの出来事によってのみ人間の救済は完成するのだということにもなる。このようなキリスト教宣教の結論を使徒ペテロは次のように告白している。

ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。

―使徒言行録四章十二節―

ここに「キリスト教の絶対性」の根拠がある。それ故に、「キリスト教の絶対性」を問うことは、とりも直さずイエス・キリストに於ける啓示そのものを問うことになるのである。言い換えると、それはイエス・キリストをどのように見るかというキリスト論の問題であると同時に、啓示の唯一性をどのように理解するかという啓示論でもある。

だが、これらの課題は三位一体論の教義を含めて歴史的にキリスト教がはじめから抱えつづけてきた課題で、哲学もからまり、思想や芸術にも影響を与えながら、この課題をめぐって教会はその時代時代に於いて分派的な離合集散を繰り返す原因ともなった。その結果教会は、ローマ・カトリック教会、東方正教会、プロテスタント教会、その他の分派、そして正統派から異端と決めつけられた分派教会まで起ることになった。

このように、「キリスト教の絶対性」を問うということは、少なくとも今日のキリスト教の在り方の根本を問うということになる。加えて「宗教」の在り方一般を問うことに連なり、ひいては、広く人間の在り方そのものまで問うことになる大きな課題なのである。このような問いは、個人の信仰による恣意または神学的主張によるものではなく、現代という歴史的現実がキリスト教会に突きつけている問いなのである。先にも述べたが、今、一人の求道者、また一介の伝道者としての私にもこの問いが厳しく突きつけられていることを覚える。

以下は、これらの課題を「キリスト教の絶対性」との関係で、わたしの信仰理解を少し述べ、皆様方とご一緒に考えてみたいと思う。その糸口として唐突のようだが、先にローマ・カトリック教会が開催した「第二バチカン公会議」に簡単に目を向けることから始めたい。

×　　×

ローマカトリック教会は一九六二年から一九六五年にかけ、聖ペテロ大聖堂に於いて、「第二バチカン公会議」を開催した。その目的は来るべき二十一世紀に向かって旧来のカトリック教会、特に「第一バチカン公会議」（一八六九年～一八七〇年）に於いて、制度的（教皇の至上権、不可謬権など）にも、神学的（啓示を理性のはしためとするスコラ主義）にも硬直の極みに至った教会の状態から脱皮する為であったと言える。一部の揶揄する人達は、この改革をローマ、カトリック教会の二十一世紀への世界戦略の建て直しの為だったというが、それはともかく、参加者はヨーロッパの司教団だけでなくアジアやアフリカからも参加し、かつてない大規模の会議となったようである。そして会議の内容は礼典憲章からはじめ全ての教令全般に及び、その公会議の公文書全集が一九八六年名古屋の南山大学の監修で日本語に翻訳され、「第二バチカン公会議・公文書全集」として中央出版社から出された。その分量は私の試算では、日本語にして五十五万語に及ぶ。ここに討議内容の目次を上記の訳本に従って記すが、これによって公会議のおおよその内容を感じることが出来ればと思う。